

はじめに

小森陽一

日本の近代文学に造詣の深い歴史学者・成田龍一さんと、学生時代第一志望の歴史学に進学することが出来ず、第七志望（当時、北海道大学文学部への志望欄は七つしかなかった）の「国文学」に行き、日本近代文学研究者となった私とは、関心の重なりもあり、いくつかの近現代の日本を再考する出版企画を出していた。その一つ、『戦後日本スタディーズ① 40・50年代』の企画で、私たち二人が聴き手となり、井上ひさしさん（以下、生前の呼びかけ方であった「ひさしさん」を用いる）から「東京裁判三部作と日本国憲法」についてのお話を伺った。それが前記の本に収録されて二〇〇九年に出版された頃、ひさしさんの『組曲虐殺』が天王洲^{てんのうす} 銀河劇場で上演され始めていた。



小森陽一（右）（撮影／井垣 亮）

この年の一月に、成田さんと私の共通の友人であるノ一

マ・フィールドさんが『小林多喜二——21世紀にどう読むか』（岩波新書）を刊行し、ちょうどこのとき来日されていたので、集英社の文芸雑誌「すばる」の企画として、座談会を行った。それが本書の特別付録「二二世紀の多喜二さんへ」「組曲虐殺」と『小林多喜二、井上ひさし最後の座談会』である。

ひさしさんと私とはそれ以前、数年にわたり、「座談会 昭和文学史」という企画を行っていたので、この日は何だか妙に懐かしい思いを抱き、その頃のように休み時間、連れ立って喫煙室に行った。習慣的に私がライターの火を差し出すと、ひさしさんは煙草たばこに火をつけた。しかし一服目で激しく咳せき込み、煙草はそのままみ消された。そして、数日前に呼吸器系の検査を受けたことを話された。私は煙草を吸うことが出来なかった。会議室に戻り、座談会は継続された。数日後、重篤な病であることが判明した。

二〇一〇年四月九日に亡くなられた後、成田さんと私は、文学者・井上ひさしの仕事の全体像を確認しておかねばならないと判断し、井上ひさし文学の研究者である今村忠純ただずみさんと島村輝てるさんに語り合っ頂座談会を行った。これが第一章「言葉に託された歴史感覚」である。

日本中が「三・一一」の衝撃のただ中であつたひさしさんの一周忌にあたる二〇一一年四月九日、「憲法のつどい」の講演会が鎌倉で開催された。その講演者の一人であつた大江健三郎

さんは、主催者側の女性の一人に娘役を担ってもらい、自分は父親役としてひさしさんの『父と暮せば』を朗読した。その場にいた成田さんと私は、大江さんとひさしさんの文学について語り合いたいという思いを共有し、かなえることが出来た。これが第二章である。そこからシリーズ化して一冊の本に出来ないかという模索が始まったように記憶している。

成田さんと私がほぼ同時に思い浮かべたのは、戦後日本の文化状況の中で、ひさしさんの多様な実践を位置付けられるのは、辻井喬さんつじいたかししかいない、ということ、第三章が成立した。

ひさしさんより七年先輩の辻井さんと同世代の大江さん、ならばひさしさんの後を継ぐ方と、ということ、成田さんや私とほぼ同世代の永井愛さんの名前が自然と二人の頭に浮かんできた。これが第四章である。

けれどもその後、様々な要因が絡んで、連続座談会は途切れてしまった。「井上ひさし研究会」が正式に発足する中で、ひさしさんの没後一〇年の節目には一冊の本にどうしてもまとめたいということになり、劇作家を取りまとめる苦勞をひさしさんと共にしていらした平田オリザさんをお願いして、締めくくりの第五章の鼎談ていだんを二〇一九年の年末に実施することが出来た。今、ひさしさんをめぐる対話を読者のみなさんに引き継ぎます。

目次

はじめに

小森陽一

第一章 言葉に託された歴史感覚

今村忠純 島村輝

9

第二章 夢三部作から読みとく戦後の日本

大江健三郎

89

第三章 自伝的作品とその時代

辻井喬

143

第四章 評伝劇の可能性

永井愛

191

第五章 「日本語」で書くということ

平田オリザ

241

特別付録 座談会「二一世紀の多喜二さんへ」

『組曲虐殺』と『小林多喜二』、井上ひさし最後の座談会——
井上ひさし ノーマ・フィールド 271

おわりに 成田龍一 327

【年表】 井上ひさしの足跡 332

*本文中に登場する戯曲の台詞は『井上ひさし全芝居』（新潮社）より引用・参照した。
また、各章末の註は、必ずしもその用語の初出ではなく詳しく論じられている箇所を原則とし、適宜、判断して付している。

構成／増子信一（第一～五章）

撮影／中野義樹（第一～四章、特別付録）

章扉デザイン・図版作成／MOTHER